

劇団☆新感線公演 宇宙防衛軍ヒデマロ3ー KILLER RISING ー

1988年8月4日〜7日 大阪扇町ミュージアム・スクエア
1988年9月30日〜10月4日 東京新宿シアタートップス

キャスト
ヒデマロ……………猪上秀徳
スペース西城五郎……………古田新太
ホイヘンス……………枯暮修
ヨークワーン元帥……………竹田団吾
マオ・ベルバード大佐……………鳳ルミ
クララ・カゼサリーヌ少佐……………仲町ゆう子
インディー中尉……………インディ高橋
フランキー少尉……………フランキー仲村
劇団「宇宙防衛軍」の人々……………出来知子
……………サコ
……………河野まさこ
スペース西城五郎ガールズ……………羽野アキ
……………周米良美
……………佐藤マコ
……………陣内かおり
最低人8823……………逆木圭一郎
D「ボーツネル……………栗根まこと

スタッフ
作……………中島かずき
演出……………いのうえひでのり
舞台監督……………西本修
照明……………松林克明(スタッフ・ステーション)
美術……………綿谷文男
音効……………今井育徳
衣裳……………桑原みきよ/丸山チエ
小道具……………竹田団吾/栗根まこと
宣伝美術……………藤井昌浩
制作……………大石時雄(ヴィレッチ)
……………戸口美佳

あとがき

若いというのはこういうことだなあ。
こういうネタ物の古いやつを、久しぶりに読み直すと、ほんとにそう思う。
スペース西城五郎をやっている古田のカッコよかったことよ。
ヨークワーンをやっている竹田団吾のプチ切れ方のものすごかったことよ。
マオ大佐の鳳ルミの美しかったことよ。
なにより、主役を務めるまだ細かったいのうえがオモチャのように飛び跳ねていた、その姿のかわかっていたことよ。
と、まあ、ノスタルジーにふけてもしょうがないので、話を進める。

東京公演第二弾がこの「宇宙防衛軍ヒデマロ3」だ。

『星の忍者』で、とりあえず東京初進出をはたした新感線はいよいよ当時の本道とも言えるネタ物勝負をかけることになる。という大げさに聞こえるかも知れないが、けっこう本気でそう考えていた。

ただくだらないだけの二時間、それを東京のお客さんが許してくれるのか。やってみなくちゃわからなかった。
が、準備だけは、他のどの公演よりも慎重にやっていたと言える。

大阪で初日をあけて東京公演まで約一月。その間に芝居を練り直した。
大阪の染を見て、そのあと、いのうえと梅田地下街の喫茶店で、どこが弱かったかをチェックし、後半の展開を変え新ネタを入れ、笑いの度を濃くした。

これほどネタが凝縮されている芝居は、新感線のレパートリーでもそうないのではないだろうか。
勿論、最近の『轟天2』や『いんど屋敷』もネタは詰まっているが、小屋が大きくなったぶん、ツッコみや切り返しに時間がかかる気がする。トップスくらいの小屋で、すぐそばに相手がいれば「オイー」とつっこむスピードのほうが、ネタ芝居には向いているのだ。本当は、もちろん若さ故の速さや切れっぷりもある。

古田の多重人格の切り返しの速さ、竹田のキャラの爆発的なハイテンションっぷり。

特に竹田には、本当に毎公演笑わされた。どんなでもない爆発力だった。どれもその時期でなければやれなかったことかもしれない。実は、へたな、いのうえ歌舞伎よりもよほどこの「ヒデマロ3」のほうが頭を使ったホンダと思うのだが、世間はなかなかそうは思ってくれないようだ。特に劇評家とかね。

なに、お笑いが一段さげすまれるのは、この国では当たり前だ。
この当時から、いわゆる「演劇界」ってやつに失望してたような気がする。

いや、はなっからなんか希望を持ってたわけじゃないんだけどね。こつちもまさらさらいわゆる「演劇」をやるとはなはないし。テレビとか小説とかを読んでフツーに「おもしろい」と言ってるフツーの人達が見に来れば絶対面白いと思えるもの、そんなものを舞台の上に乗っけたらと思っただけだし、今でもそれはかわらない。

まあ、マニマニな要素はそれなりに入ってますけどね。書いてるこつちの趣味趣味な要素とか。それは否定しませんが、とにかく、まあ、そんな思いも含めて、ネタ物だけと戯曲集にしました。

○内のト書きで、セリフ言ってる人物とは別の人物の動きを指示するので本当ならセリフ行替えて独立させなくちゃいけないものもあるのですが、「セリフ喋ってる間に動くんだよ」とって気分を入れ込んでたりする。この当時は結構そういう書き方をしていた。そのくらいの速度で展開されてたんだと想像して下さい。

ではまた。